

巻 頭 言

季刊誌『腎と骨代謝』の創刊から現在まで

鈴木 正司*

CKD 患者（児）の「腎性骨異常栄養症（ROD）」の概念は、1943 年に 2 人の中国人（Liu & Chu）により提唱された¹⁾。その後 1960 年代後半からの慢性腎不全に対する長期維持透析の黎明・普及の時代を経て、2006 年の国際腎臓病診療ガイドライン機構（KDIGO）による新たな概念「慢性腎臓病に伴う骨・ミネラル代謝異常（CKD-MBD）」²⁾へ、と移行した。

その間に、1970～71 年に活性型ビタミン D（VD）が発見・同定され、それから数年遅れて実臨床の場に治療薬剤として登場することになる。そして 1981 年にはようやくわが国でも活性型 VD アナログ（ α -calcitriol）が認可され使用される時代になった。

そのような時代の到来に合わせて 1983 年に、現在の「CKD-MBD 研究会」の前身である「腎と骨代謝研究会」が発足した。そしてそこでの発表・討論の内容はプロシーディング（研究会記録）として残された。さらにその 5 年後の 1988 年（昭和 63 年）2 月によりやうく季刊誌として本誌の創刊に結び付いたのである。当時の編集委員は…黒川 清，小椋陽介，酒井 糾の諸先生，それに若輩の小生を加えた 4 名，編集顧問は…大野丞二，平沢由平，藤田拓男，折茂 肇，尾形悦郎，越川昭三，森井浩世の 7 名の先生方であった。

創刊号では大野丞二先生（故人）が「創刊にあたって」を執筆され，Slatopolsky，Kleeman，Ritz が message を寄稿し，review には森井浩世先生（故人），臨床研究に 8 編，実験研究に 2 編，症例報告に 6 編，連載 1 編（骨塩含量測定法），さらに編集後記は黒川 清先生が執筆…

* 信楽園病院腎センター（〒950-2087 新潟市西区新通南 3-3-11）

の内容であった。当初はそれまでの研究会のプロシーディング内容を論文化して残すことから始まった。それらの作業が一段落した時点から、特集雑誌としての体裁を呈するようになり、毎号に特集を組んだ形の現在のスタイルに定着した。このようにして創刊より32巻、つまり32年目を迎えることになったが、諸般の事情により本年の32巻をもって惜しまれつつ休刊が決まった。

この32年間には、RODあるいはCKD-MBDの分野で大きな発見や知識の進歩、あるいはそれらを背景とした治療上の進歩がみられた。活性型VDの発見の後にも、軟部組織の石灰化（骨化）の機序として血管平滑筋細胞から骨芽細胞への形質転換、FGF23とKlotho、およびカルシウム感受性受容体（CaSR）の発見…など、そしてこれらを巡る研究から、calcimimetics開発など新たな治療上の発展もあった。さらにはリン（P）のコントロールのための「P吸着薬」（Al, Mg, Ca, La, Fe, ある種のポリマー類）の発想を超えた「P吸収の阻害薬」の開発の萌芽などは、新たな発展のseedになりそうである。

これまでの32年間、本誌がこれらの分野での動向に関する情報提供の場として、些かでもお役に立つことができたのであれば、初期の編集委員の1人として幸甚なことである。

文 献

- 1) Liu SH, Chu HI : Studies of calcium and phosphorus metabolism with special reference to pathogenesis and effects of dihydroxycholesterol (A. T. 10) and iron. *Medicine* 22 : 103-161, 1943
- 2) Moe S, Drüeke T, Cunningham J, et al : Definition, evaluation, and classification of renal osteodystrophy : a position statement from Kidney Disease : Improving Global Outcomes (KDIGO). *Kidney Int* 69 : 1945-1953, 2006